異世界転生性活
基本CG12枚
総枚数166枚
もちもち堂

日常が……ただ何も変わらずに
過ぎていく日々が退屈だった。

だからなのだろう。

突然目の前に現れた怪しい男の
誘いに乗ってしまったのは。

『もし君が望むなら、異世界に
転生させてあげるよ』

普通こんな事を言われれば怪しむし
避けようとするだろう。

だけどバカな俺は、知らない…新しい
何かにワクワクする気持ちが抑えきれず、
深く考えもせずにその誘いに飛びついて
しまった。

何の根拠もなく物語の主人公のように
自分ならどうとでもなると思い込んで…。

それが今のこの結果という訳だ。
今の俺は奴隷商人たちが開催している
競売の商品として並べられている。
世の中俺が考えていたような都合のいい
話なんてあるわけがなかった。

アニメや小説の異世界転生のようなチート
など何もなく俺は女の体に転生させられ、
気付けば荒野に裸で放り出されていた。
ただ運が良いのか悪いのか、たまたま通り
かかった奴隷商人に捕まったおかげで、
そのまま野垂れ死ぬことはなかったが。

自分の浅はかさと後悔の念に泣きそうに
なるが誰も助けてなんてくれない。
当たり前だ。本当の俺の事を知っている
人間なんて、ここには誰もいないのだから。

（まぁ、奴隷商人に捕まらなかったとしても俺はこの世界のことを何も知らないし、詰んでいただろうけど）
（不幸中の幸いは言葉は通じるってことだけだな）

意味のない考えで現実逃避をしている
俺をよそに競売はどんどんと進んでいく。
どうやらとうとう俺の番が来てしまった
ようだ。
真上から当てられるライトの光が眩しく
目を細めてしまい、同時に辺りから聞こえる
沢山の声のせいで誰が俺を買おうとして
いるのかよく分からない。
ビクッ

周りが盛り上がるにつれ、今更ながら
恐怖で足が竦んでしまう。
おそらく性奴隷として買われるのなら
まだ幸運な方なのだろう。最悪、遊び半分
で殺されることだって十分に考えられる。
ビクッ

（……あぁ、どうして俺はあんな馬鹿な選択をしてしまったのだろう。もし過去に戻れるなら殴ってでも止めているのに）
競売で熱狂する男たちの声を聴きながら俺はこれから訪れるであろう自分の未来に悲観し、もう何も考えたくなくなってしまった。

「……はず、だったんだけどな」
二年前に行われた自分が売買されていた競売でのことを思い出しながら、仕事着として着用している仕立ての良いメイド服のスカートを摘まみ上げる。
もう何度も着ているはずなのに、いまだに自分が女物の服…それもメイド服を着ているなんて可笑しく思えてしまう。

そう…俺は今、化け物…モンスターや魔法が
存在するらしいファンタジーの世界で、
この町の領主の元『アニー』と言う名前を
付けられ、メイドとして働いているのだ。
（…まぁ、町から出たことはないから
モンスターなんて見たこともないけどね）

現代で男として暮らして来たので最初の
うちは仕事もあまり上手くいかず失敗
ばかりしていた。
けれどもメイドの先輩たちは俺が出来る
ようになるまで根気よく教えてくれたの
で想像してたよりも早くこちらの生活
にも慣れることが出来た。
ただ、覚えることが多すぎて最初の一年は
あっという間に過ぎ、帰る手段を見つける
ことの出来ないまま気付けばこの世界で
二年も過ごし、今では一人前のメイドに
なってしまったが。

正直こんなのは望んでいた生活ではない。
だが、それでも俺は恵まれているのだろう。
知り合いもいない土地で腹を空かす
こともなく、こうやって安全に生活を
することが出来ているのだから。

それでも一つだけ今の生活に文句があると
すれば俺の主人になったおっさんの夜の
相手をしないといけない事だ。
どんなに嫌でもここを追い出されたら
後がないので逆らうことが出来ない
俺はおっさんの相手を嫌々していた。
…そう、そのはずだったのに。
ハーーーッ

「…あむ❤ちゅぷ❤ちゅ…れろぉ❤」
俺は慣れた様子で丹念に舌を這わせながら主人であるおっさんのイチモツを舐め上げる。
ここに来てから何度も繰り返した行為なので、何処をどうすればおっさんが喜ぶのかなんて、もう覚えてしまっていた。

正直、男の相手なんかしたくない。
けれども人間とは不思議なもので
何度も体を重ねていくうちに情の
ようなものが徐々に芽生えてしまう。
……いつの頃からか俺はこのおっさんが
相手なら渋々でも受け入れてしまって
いたのだ。

けれど、俺がそうなってしまった原因は
おっさんにもあると思う。
何故なら俺の主人であるこいつは
俺にだけは異様に甘いからだ。

例えば口の利き方。
夜の相手をしているとき以外はちゃんと敬語を使っているとはいえ。
それ以外の時の口の利き方やおっさん扱いをしていることに対しても俺は一度も怒られたことがないのである。

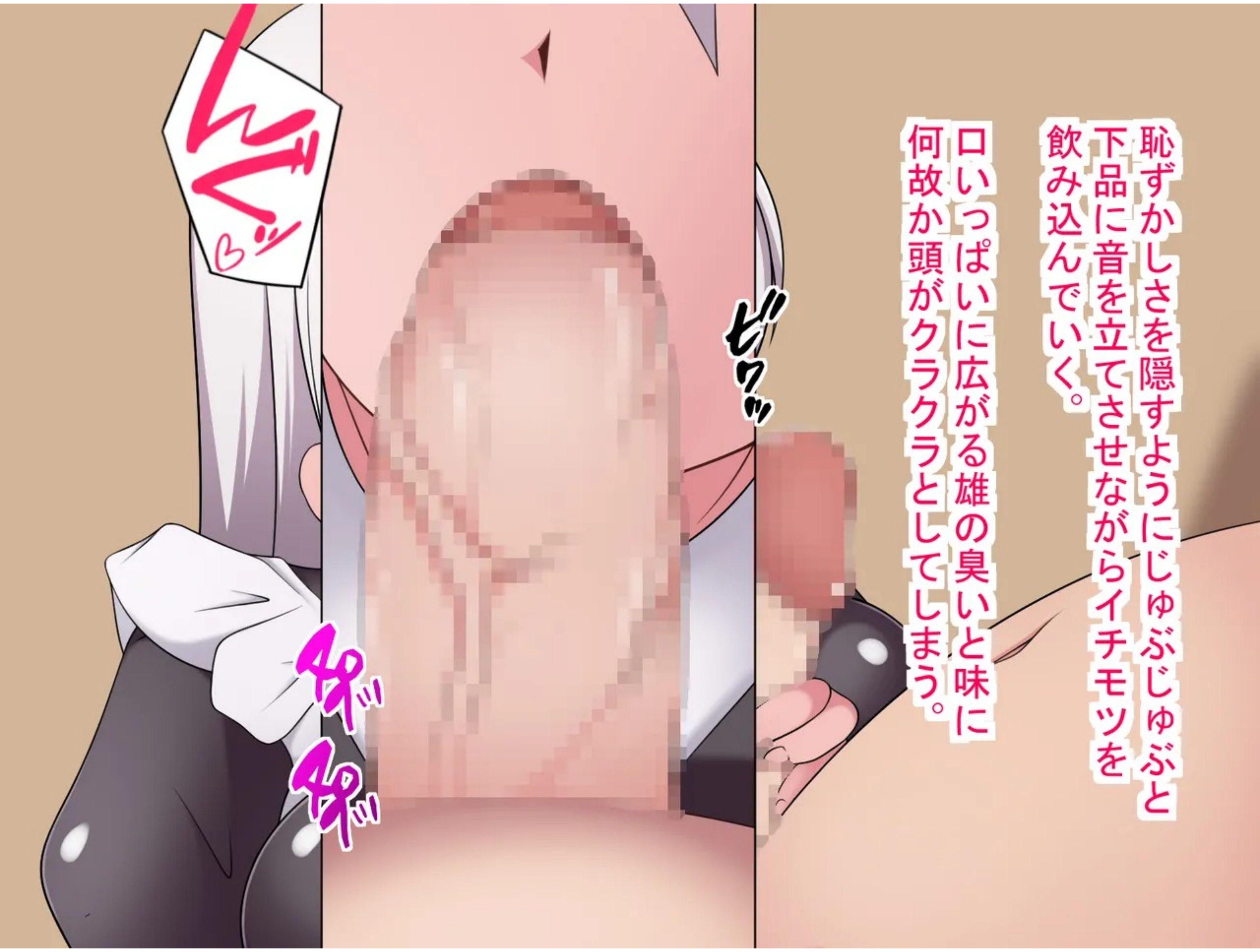
普通こんな事をすれば罰が与えられてもおかしくないはずなのに。
おっさんは公式の場でさえ気を付けるのならこのままで構わないとさえ言うしまつなのだ。
ビクッ
ちゅぷっ
ちゅぷ
こうやって他とは違うという明確な特別扱いをされ続ければ、誰だって少しは好意を持ってしまうだろう。

（…うん、だから俺がおかしい
ってわけじゃないよな）
俺は自分にそう言い聞かせながら
舌の動きを止めず熱く脈打つ
おっさんのイチモツに奉仕を続ける。
ビクッ
ちゅぷっ
ちゅぷ
はあッ❤

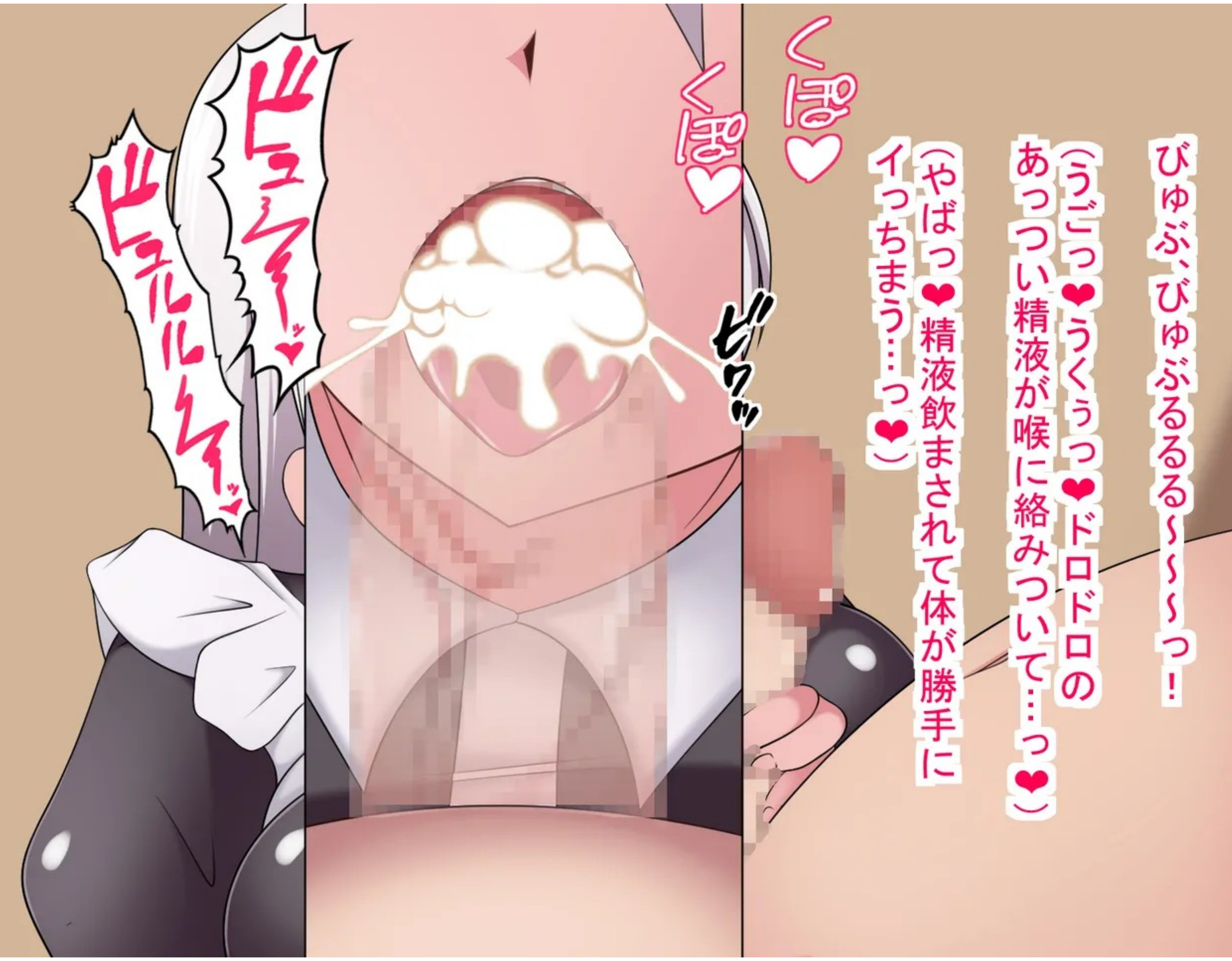
「はむ…っ❤ちゅぶ❤れろ…れろ❤ちゅ…っ❤ちゅる、ちゅるる❤」
「うっ…！熱い舌がニュルニュル絡み付いて…っ！う、くっ、気持ちいいぞアニー」
ビクッ
「じゅぶっ❤ちゅ…じゅる❤はぁ…❤はぁ…❤うっさい…！」
ちゅぶっ
ちゅぶ
「あむ…ちゅる❤相手なんて俺以外にもいっぱい、いる癖に。毎回毎回俺の所に来やがって…こんなデカいのを相手にするこっちの身にもなれよな！」

「そんなこと言いながら一生懸命、ご奉仕してくれるアニーが私は好きだぞ」
「…っ！す、好きとか変なこといきなり言うなよな！」
「ごめん、ごめん。でも、嘘は言ってないよ？」
ウウ…
ドキドキ

「…ふんっ！…ちゅぷ、ちゅ…じゅる❤」
「こんな、くっさくて蒸れ蒸れのチンコ
舐めさせながらアホなこと言いやがって」
ビクッ
んん
ハーーッ♥
ハーーッ♥
ちゅぷっ
ちゅぷ


恥ずかしさを隠すようにじゅぶじゅぶと
下品に音を立てさせながらイチモツを
飲み込んでいく。
口いっぱいに広がる雄の臭いと味に
何故か頭がクラクラとしてしまう。
ビクッ
んぐッ♡

「う、ぉ！おぉっ❤そんないやらしく
チンコに吸い付いて…っ❤」
くぽ❤
くぽ❤
「く…ぅっ❤下品なフェラ顔を晒してる
姿も、やっぱり最高に可愛いぞアニー❤」
ビクッ
ヌモ
ヌモ❤
「ふぇんなふぉといぅなぁ❤」
「お、おぉっ❤もごもごされながら
喋られるのも気持ちいいっ❤」
「…っ！もう、無理だ。
このまま口の中に出すぞ！」



びゅぶ、びゅぶるるる〜〜〜っ！
（うごっ❤うくぅっ❤ドロドロの
あっつい精液が喉に絡みついて…っ❤）
（やばっ❤精液飲まされて体が勝手に
イっちまう…っ❤）
くぽ❤
くぽ❤
ビクッ
ビュ〜〜ッ❤
ビュルルル〜〜ッ❤

「…んぶ、んっ❤んぷ…ねろっ❤んく❤濃いのがいっぱい…っ❤毎日処理してやってるのに、なんでこんな飲み込めないくらい出すんだよ」
「そんなのアニーとしているからに決まっているじゃないか。…ほら、まだ全然し足りなくて勃起が収まらないんだ」
んん
ちゅぷっ
ちゅぷ

「…あほ。そんなに見せつけなくても
こんなビクビクしてるのに分からない
わけないだろ」
ビクッ
ハーー〜〜ッ♥
ハーー〜〜ッ♥
ウフ…

「…ほら、もう濡れちゃってるから
そのまま入れちゃっていいぞ❤」
ビクッ
「っ！アニーーっ！」
ドキ❤
ドキ❤

恥ずかしさで目を逸らしながら、先ほどの
フェラでテカテカに愛液を溢れさせ物欲し
そうにヒクつく秘所を見せつける。
そんな俺の仕草に我慢出来なくなったのか。
おっさんはガチガチに勃起したイチモツを
押し当てると勢いよく挿入する。
はあッ❤
う…くッ
ハ～～ッ❤
ハ～～ッ❤
ビクッ

「んっ❤ふぅっ❤…んく❤」
熱く滾った異物が奥へ奥へと入れられ
内側を広げ掻き分ける感触は何度経験
しても慣れるものではなく、口からは
艶声が漏れてしまう。

「ふ、くぅっ❤ん…ぅっ❤ん、ん〜〜〜っ❤」
ただの女のように感じている姿を見せたくなく。押し寄せる快楽に耐え、必死に声を抑えようとするが。
その姿が余計におっさんを興奮させたのか、先ほどよりも腰の動きが一層早くなってしまう。
ビクッ

「ひぐっ❤あ、あぁっ❤深いとこ…おく、コンコン突かれて…っ❤ぁっ❤あ、あぁっ❤う、くぅっ❤気持ちいの止まらない…っ❤」
「アニーの体、吸い付いてくるみたいに柔らかくてずっと触っていたくなる」
はあ゛❤
ビクッ
ハーッ❤ハーッ❤
あぁあぁ❤
ズプッ
ズプッ

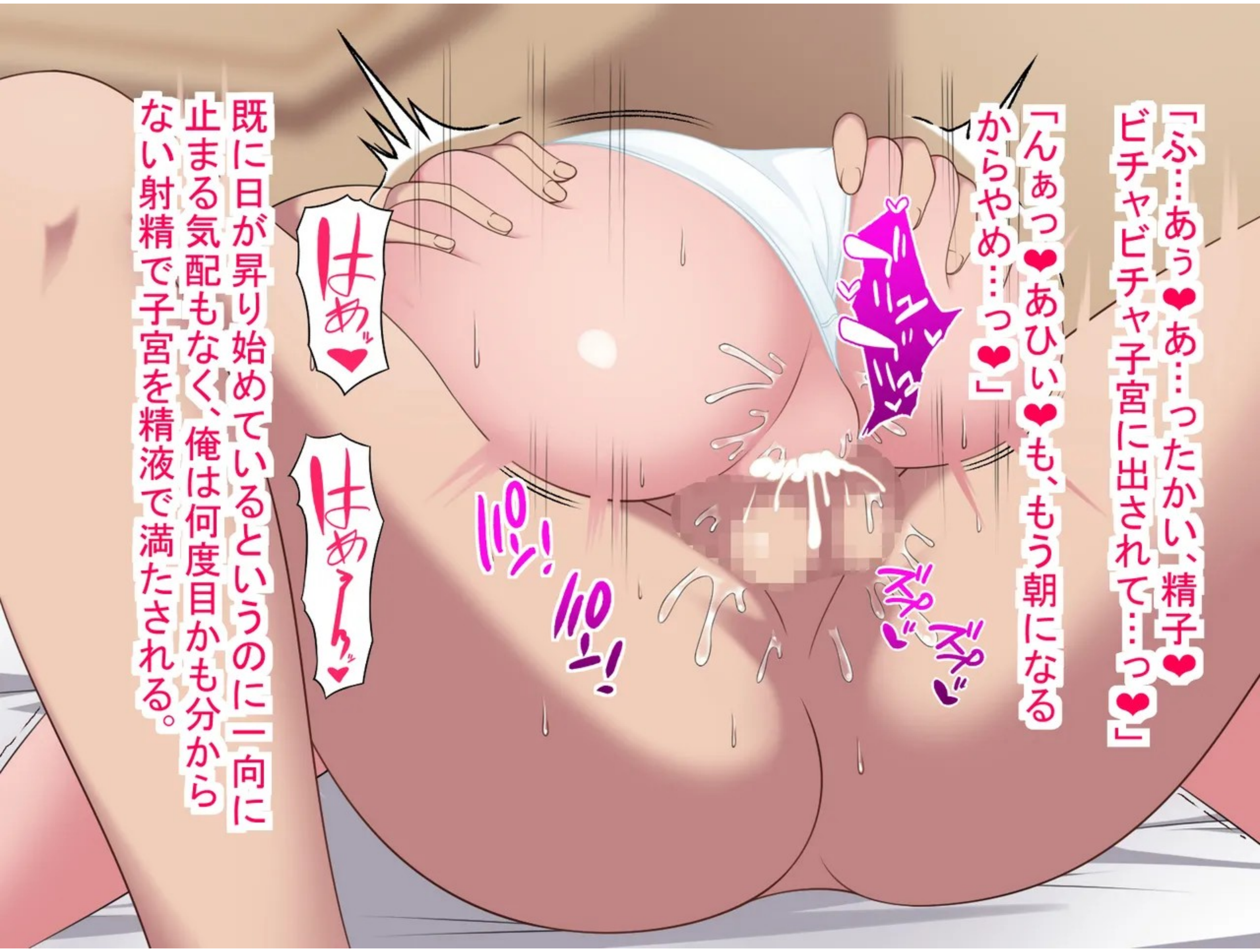
「ひぅっ❤おっぱい揉みながら、
いやらしいこというなぁ❤」
「あっ❤…あぁ、ん…っ❤
す、吸うのも、だ、めぇ…っ❤」
はぁッ❤
ビクッ
ハーッ❤ハーッ❤
あぁぁぁ❤
ズプッ❤ズプッ❤

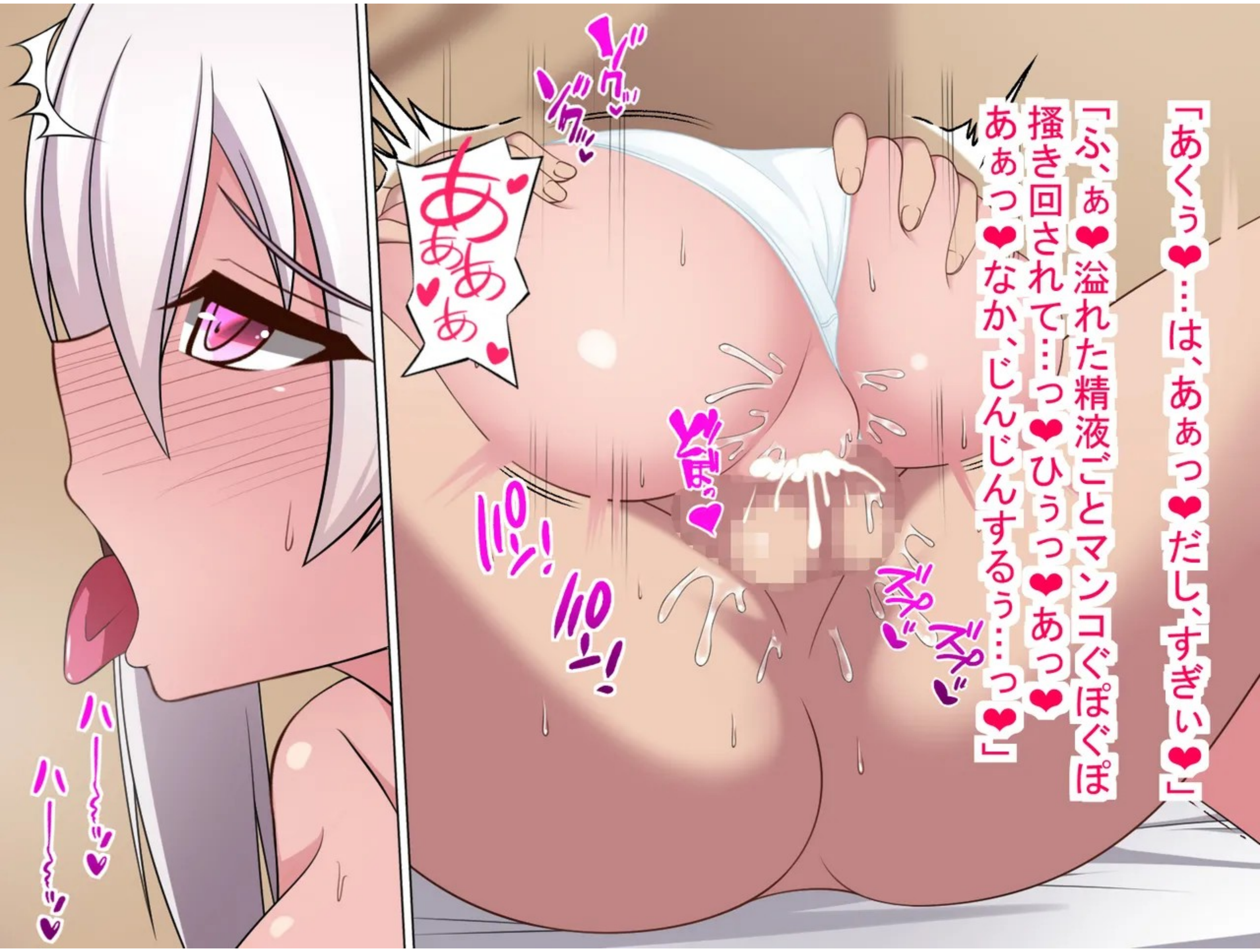
発情しきった体は俺の意志とは無関係に
愛液を更に溢れさせ、まるでもっとして
欲しいと言わんばかりにイチモツに
甘く絡みつき締め付ける。
はあッ❤
ビクッ
ハーッ❤
ハーッ❤
ああぁぁ❤
ズプッ
ズプッ

「くぅっ❤アニーのキツキツおまんこ
精液欲しいってキュウキュウ締め付けてっ」
「はぁ…はぁ…❤んくっ❤」
「おっさんの…中でビクビク膨らんでっ❤
ふぁっ❤ぁっ❤出されちゃうっ❤いつも
みたいに中にいっぱい出されちゃう…っ❤」
はぁッ❤
ビクッ
ハーッ❤
ハーッ❤
んっ
ズプ
ズプ

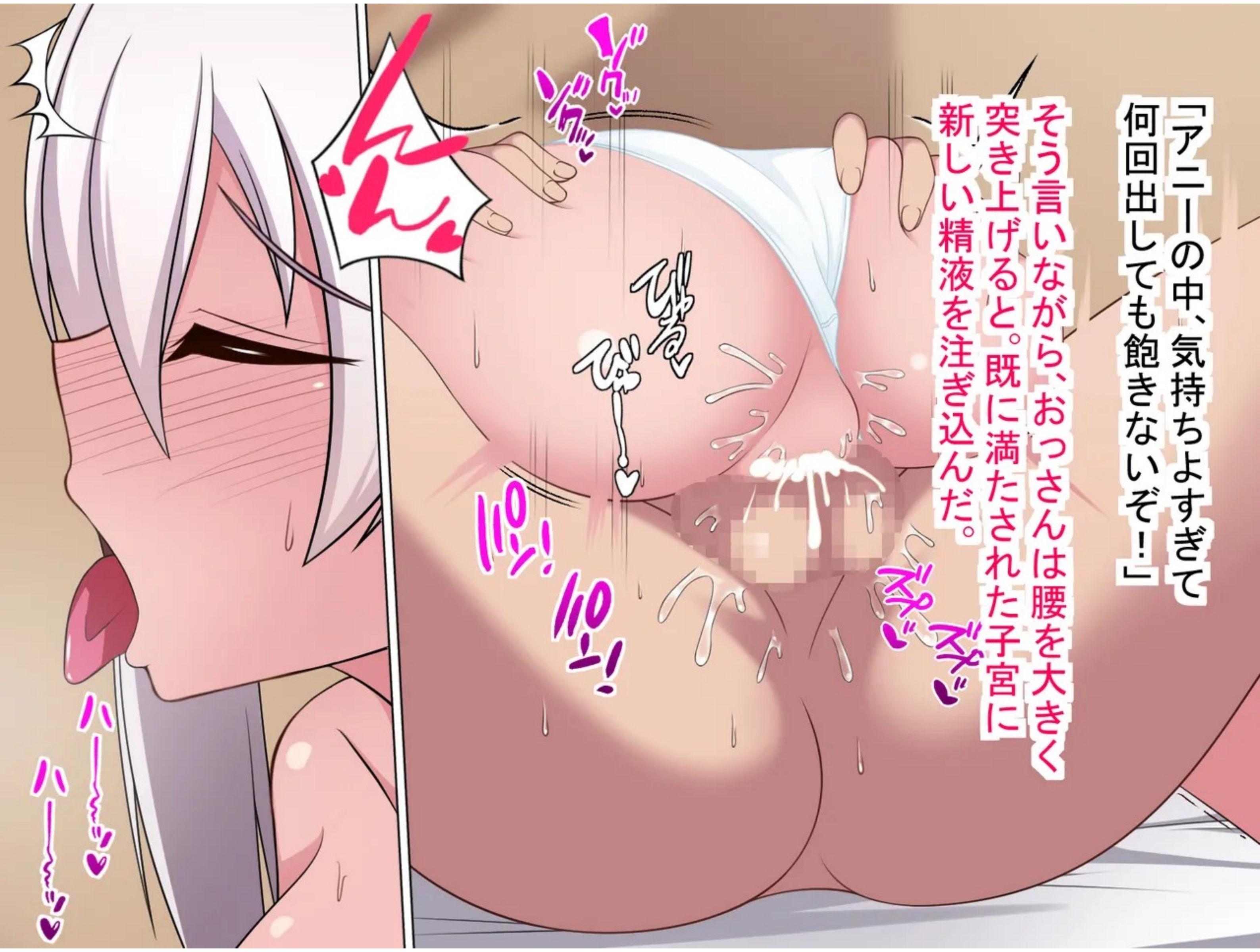
「ああ、出すぞ、アニーっ！
もう…っ、でるぅ…っ！」
思いっ切り腰を押し付けると同時に
熱くドロドロとした精液が子宮内に
射精される。
はあッ❤
ああああ❤
ビクッ

「お、おぉっ❤なかに、あっついのがいっぱい…っ❤ひぁっ❤んくぅ…っ❤おっさんの精液子宮に染み付いちゃうよぉ❤」
はぁ❤
ビクッ
ハーッ❤
ハーッ❤
あぁぁぁ❤
どぼっ❤


「ふ…あぅ❤あ…ったかい、精子❤ビチャビチャ子宮に出されて…っ❤」
「んぁっ❤あひぃ❤も、もう朝になるからやめ…っ❤」
はぁ❤
既に日が昇り始めているというのに一向に止まる気配もなく、俺は何度目かも分からない射精で子宮を精液で満たされる。



「あくぅ❤…は、あぁっ❤だし、すぎぃ❤」
「ふ、ぁ❤溢れた精液ごとマンコぐぽぐぽ掻き回されて…っ❤ひぅっ❤あっ❤あぁっ❤なか、じんじんするぅ…っ❤」
あ❤あああ❤
どぼっ❤
パンッ!
パンッ!
ズプッ
ズプッ
ハーッ~~ッ❤
ハーッ~~ッ❤


「アニーの中、気持ちよすぎて
何回出しても飽きないぞ！」
そう言いながら、おっさんは腰を大きく
突き上げると。既に満たされた子宮に
新しい精液を注ぎ込んだ。
パンッ！
パンッ！

「はひっ❤おく…っ❤グリグリしながら
射精するなぁ❤ひぁっ❤あぁっ❤
お腹のなか、いっぱいで溢れてきちゃう❤」
「はぁ…はぁ…❤…んくぅ❤
こんなに出されたら本当に
赤ちゃん出来ちまうぞ❤」
ゾグッ
ゾグッ
はあ❤
はあぁ～ん❤
パンッ
パンッ
ズプッ
ズプッ
ハーー～ッ❤
ハーー～ッ❤

「…何だこれ？」

おっさんの部屋を掃除中、本棚に隠すように入れられていた古い写真立てを見つけた。

隠していたもの…それも自分の主人である人の物を勝手に見るのは流石に不味いとは分かっていたが。俺は好奇心を抑えきれずそれを取り出して見てしまった。

（……そっか、そう言う事か）
写真に写っていた自分にそっくりな人物とそこに添えられた『我が最愛の母』という言葉に、ようやく前から疑問だったことが分かった。
（……だから、なのかな？
おっさんが俺にあんなに甘いのは）

おっさんは亡くなったこの人の面影を
俺に求めていたのかもしれない。
普通なら誰かの代わりにされている
なんて知れば怒りや嫌悪感を抱くのだろう。
でも俺はそれでも別にいいと思えてしまった。
たとえ誰かの代わりでも自分を求めて
くれることに嬉しさを感じてしまったからだ。

初めて自分からおっさんを部屋に誘ってしまった。俺は緊張と恥ずかしさを誤魔化すように自分から積極的に腰を動かしてしまう。
「何だか今日はやけに積極的なんだな」
「んっ❤なんだよ、せっかくサービスしてやってるのに嫌なのかよ。毎回避妊しないであんなに出してるくせにさ」
ビクッ
んん

「…いや、避妊はしているぞ。そうじゃなかったらとっくに子供が出来てるさ」
「いつもは君の部屋に来る前にきちんと避妊魔法をかけてるよ」
「…そっか、そうなんだ」
ビクッ

俺の言葉尻が小さくなる。
別に元々妊娠がしたかった訳ではない。
それでもおっさんのその言葉に少しだけ
寂しさを感じてしまった。
そんな俺の様子に気付いたのか。おっさんは
少し考える素振りをした後、俺の目を見つめ
とんでもないことを言い出した。
ビクッ
う…くッ

「もし、子供が出来たら君は心まで私のモノになってくれるかい？」
「…へ？」
「好きなんだ、アニー。だから君の身も心も私のモノになって欲しいんだ」
ビクッ

「え⁉あ、その…いきなり
そんなこと言われても…」
顔中が真っ赤に染まっているのが分かる。
おっさんの告白に歓喜で胸がドキドキと
飛び跳ね頬がにやけてしまう。
ビクッ
ドキ
ドキ♥

「頼む…アニー。君が好きすぎて
たまらないんだ。私が出せるものなら
何でも出す…だから…っ！」
「ひぁっ❤あぁっ❤そん、な何度も
言いながらズンズン突くなぁ❤」
「うっ❤あくぅ❤だめ…っ❤子宮口にっ❤
お腹の奥にちゅっちゅしないでぇ❤」
はぁ❤
ドキ❤ドキ❤
ビクッ
あぁあぁ❤

「はぁ…はぁ…❤あぁあっ❤やめ…っ❤
これ以上は気持ちよすぎて本当に
おかしくなるからっ❤」
俺のその言葉に先ほどまでのおっさんの
激しい動きがピタリと止まる。
はぁ❤
ドキ
ドキ

「……もし本当に止めて欲しいなら
これ以上はしないよ」
「あ……」
何かを確かめるように覗き込んでくる
おっさんの瞳。多分ここで拒否をしたら
本当に止めてくれるのだろう。
ビクッ
ドキ♥ドキ♥

（そうだよ。そうすればもう男に…
おっさんに抱かれなくてすむ。
最初はそれが望みだったじゃないか…）
そのはずなのに何故か喉の奥から
言葉が出てこない。
もう二度とおっさんに愛されないと思うと
心が苦しくてたまらないのだ。
ビクッ
ドキ♥
ドキ♥

…だから俺は自分の気持ちに正直になることにした。
今まで見えないように奥の奥にひた隠しにしてきた感情に…。
ビクッ
ドキ♥
ドキ♥

「……あほ、ばか。ここまでされて
今更離れられるわけないだろ」
「――やめちゃ、やだよ。このまま
ずっと離さないでずっと一緒いてよ」
ビクッ
ドキ♥ドキ♥

「んっ❤ちゅ、ちゅぷ…❤
はぁ…❤ん…ちゅ❤」
軽く唇を唾んだ後お互いの舌を絡め
唾液を交換する。今までとは違う恋人の
ように愛しさを込めたキス。
それは頭の奥が痺れるように甘く
蕩ける感触で、俺は夢中になり唾液を
味わうようにさらに舌を入れる。
ちゅぷっ
ちゅぷ

ふ～～
ふ～～
「れろ…❤あむっ❤ちゅぶ❤
ちゅる…じゅるるっ❤」
熱い吐息を吐きながら貪り激しくなる
それは今まで感じたことのない興奮と
多幸感を与えてくれる。
ちゅぷっ
ちゅぷ

フ～～
フ～～
「クスクス♪ホントに元気だな❤キスしただけで、またおっきくなってきたぞ」
「いいぞ❤まだ出したりないんだろ？もう俺の全部はおっさんの物だから好きにしていいんだぞ❤」
ちゅぷっ
ちゅぷ

はぁッ❤
「ひぅっ❤あっ❤あくぅっ❤こんな、
はげしくされたらっ❤ん、あっ❤あぁっ❤」
押し寄せるあまりの快楽の気持ちよさに
足を絡めしがみ付いてしまう。
前まではおっさんに抱かれるたび自分が
女だと自覚させられそうで嫌だったが
今は女であることが嬉しくてたまらない。

心まで愛し合うセックスが此処まで
気持ちいいとは思いもしなかった。
おっさんも避妊無しの子作りセックスに
興奮しているのかいつもより激しく俺を
求めてくれる。
はぁッ♥
ゾクゾクッ
はぁ～～ッ♥
ハーッ
ハーッ♥

「んひぃっ❤あっ、あぅっ❤
やぁ❤おく、響いて…っ❤」
「アニー、すごく可愛いぞ」
「…っ❤ば、かぁ❤ばかばかばかぁ❤
いま、そう言うこと言うの反則っ…❤」
はぁッ❤
はぁ～ッ❤

「ひぁっ❤あ、あぁっ❤幸せすぎて
お腹の奥キュンキュンしてるぅ❤」
「ふぁっ❤ああんっ❤子宮降りて
来ちゃってるよぉ❤」

時間を忘れ汗だくになりながらも
ようやく手に入れることのできた
幸せを感じながらお互いを求めあう。
「んっ❤あ、ぅっ❤おっさんの…膣内で
ビクビクおっきくなって来て…っ❤
…ん、んんっ❤」
「いいぞ❤このまま出して。
おっさんの精液で俺を孕ませて…❤」
「ああ、だすぞ！アニーー！私の子を孕めっ！」

「…ふふ❤おっさんのちんこガチガチでまだまだ、し足りなさそうだな❤」
「実は俺もなんだ❤ほら、おっさんのちんこ欲しくてオマンコえっちなお汁でトロトロになっちゃってる❤だから、な…❤」
ハーーッ❤
ハーーッ❤

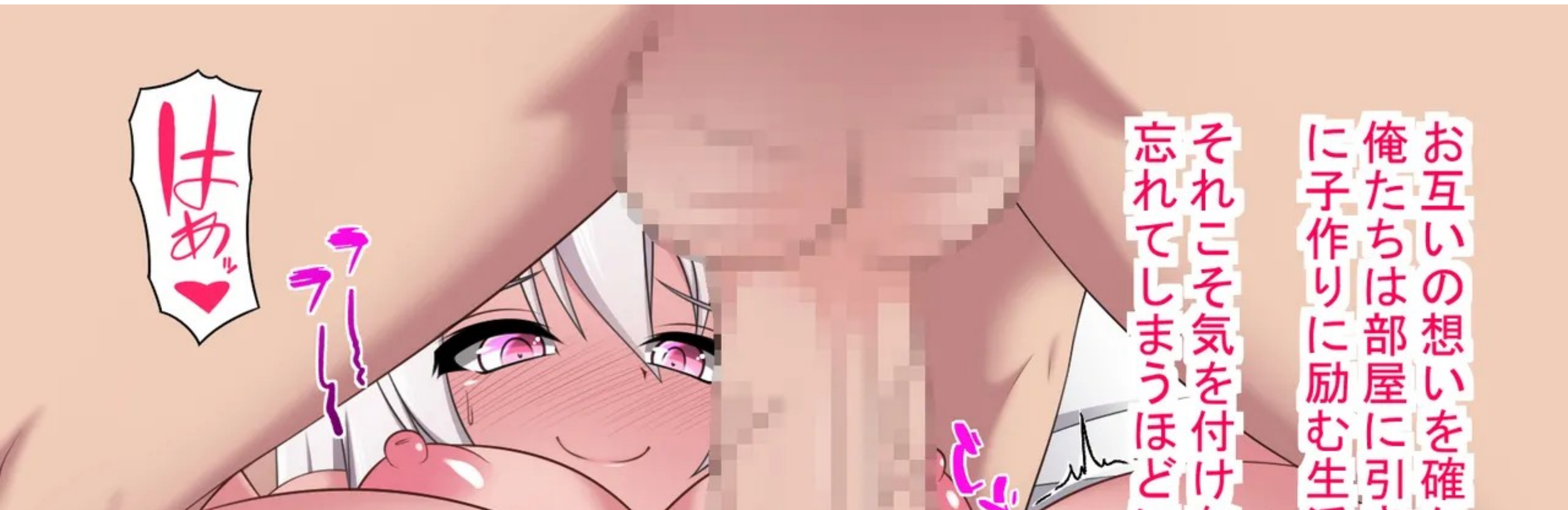
「っ！アニーーっ！」
自分から媚び腰を突き出す俺におっさんは
応え、まるで動物の交尾ような格好で腰を
激しく押し付ける。
ビクッ
はあッ♥

「ひぁっ❤うくぅっ❤う、後ろからするの
えっちくて恥ずかしいのに、んっ❤はあっ❤」
「犯されてるみたいで…っ❤おほぉっ❤
くっ、はぁっ❤興奮しちゃうよぉ❤」
はぁッ❤
ビクッ

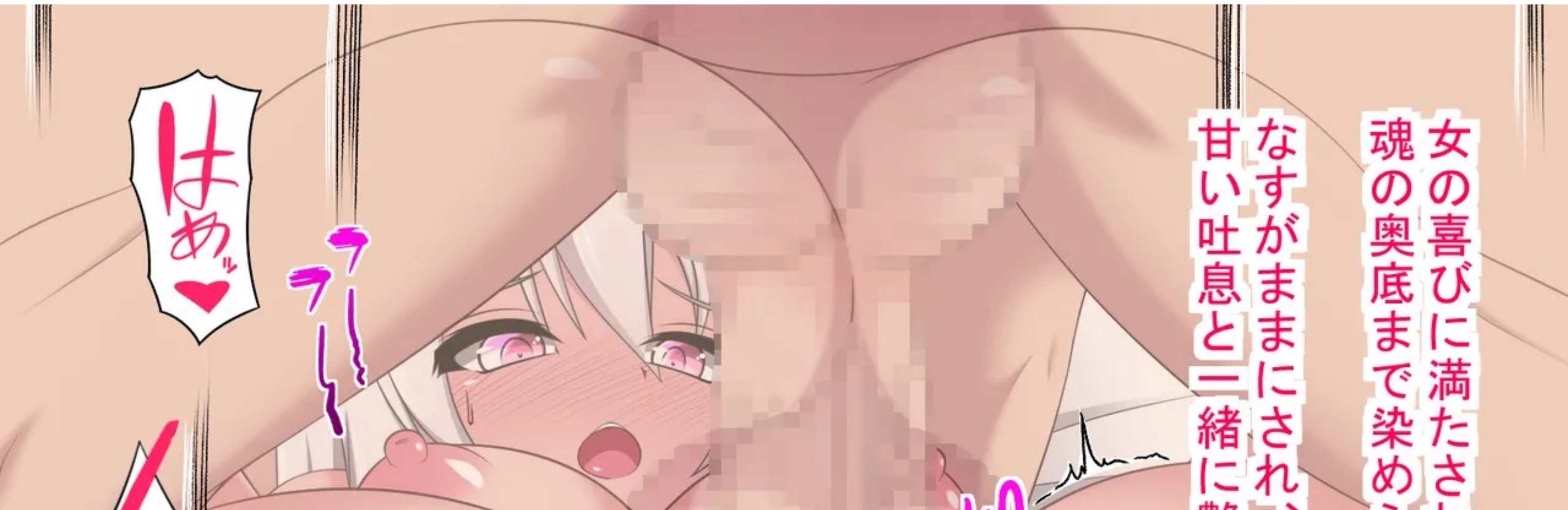
（あ、あぁっ❤気持ちいいの我慢しないで受け入れてるだけなのに…っ❤）
（ひぐぅっ❤お、おっさんとの…っ❤好きな人とのセックス気持ちいいっ❤）
後ろから突き上げられる度、獣のような嬌声をあげてしまい、のめり込むように行為に没頭する。
はぁッ❤
ビクッ

「んっ❤ひぅっ❤…んひぃっ❤
おっさん…っ❤すきぃ❤」
「好きすぎておかしくなっちゃうよぉ❤」
「っ！ああ、私も好きだ！愛してるぞ！
アニーっ！だからなこのまま中で
受け止めろっ！」
はぁッ❤
ビクッ
あぁぁぁ❤
パンッ
パンッ
ズプッ
ズプッ

びゅぶ、びゅぶるるる～～～っ！
「ひぎゅっ❤あっ❤あぁっ❤んはぁっ❤
これ、すごぉ…❤❤チンコ、子宮とちゅー
しながら、びゅ～ってあっついの中に
流し込まれて…っ❤」
「んん～～っ❤感じすぎ、てっ❤
あたま、おかしく…んあっ❤あああぁっ❤」
はぁッ❤
ビクッ
あぁぁぁ❤


お互いの想いを確かめ合ったあの日から
俺たちは部屋に引きこもり、ただひたすら
に子作りに励む生活を送っていた。
それこそ気を付けなければ寝食を
忘れてしまうほどに。
はあ゛♥
フー〜
フー〜

「あぅっ❤ん、ひぃっ❤なか、ぞりぞりされながらそんな、奥もコンコンってされたら…っ❤」
「あひぃっ❤頭の奥チカチカ光って…っ❤ふ、ぅぁ❤あぅっ❤頭真っ白になっちゃう❤」
ズプ
ズプ
はぁ❤
んん


女の喜びに満たされ、体だけでなくまるで
魂の奥底まで染められる快楽の波に晒される。
なすがままにされ、絶頂するたびに口からは
甘い吐息と一緒に艶声が漏れてしまう。
はあッ♥
パンッ!
パンッ!
ズプッ
ズプッ

「んっ❤んんっ❤全身がオマンコになったみたいで…っ❤ひゃうっ❤あ、ぁっ❤お腹の中、掻き回されて、イクの止まらないっ❤」
「私もっ！アニーのなか気持ちよくて…っ！うくぅっ❤また、なかでイクぞ！」
「うん❤おっさんの精子で赤ちゃんの部屋いっぱいにして俺を孕ませて…っ❤」
ハーーッ❤
ハーーッ❤
はぁ❤
んん❤
ズプ
ズプ

びゅるっ、びゅぶるる～っ！
「あぁっ❤あくぅ…っ❤赤ちゃんの素
子宮にいっぱい入って…っ❤」
精液を子宮に注ぎ込まれる度、快感と
多幸感にゾクゾクと背筋が震え何度も
イってしまう。

「はぁ…❤はぁ…❤…ふふ❤こんなにいっぱいしているんだし、もう赤ちゃん出来ちゃってるかもな？」
「…どうだ？パパになるかもしれない気持ちは」
はぁ～～ッ❤
ハ～～ッ❤
ハ～～ッ❤
はぁ❤

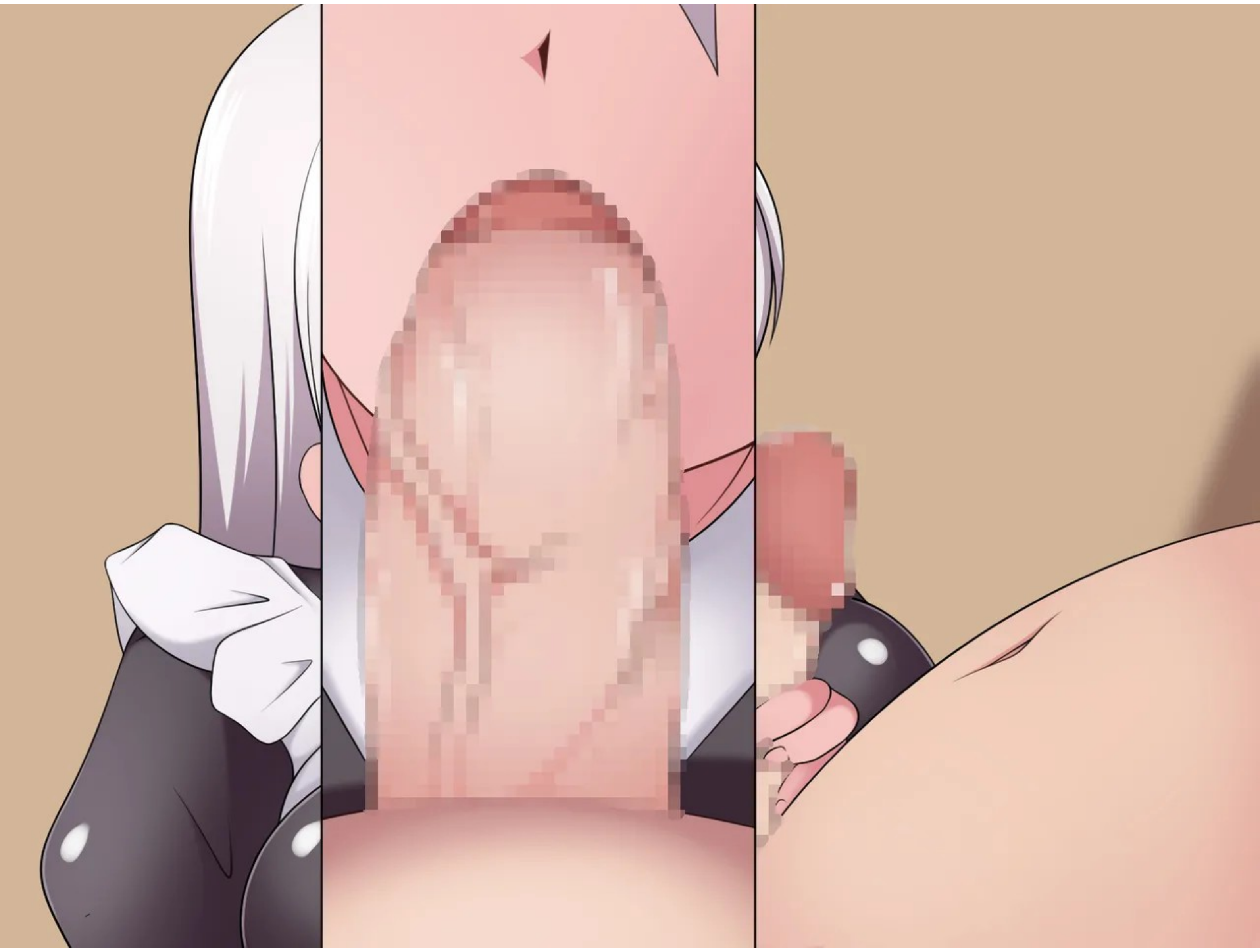
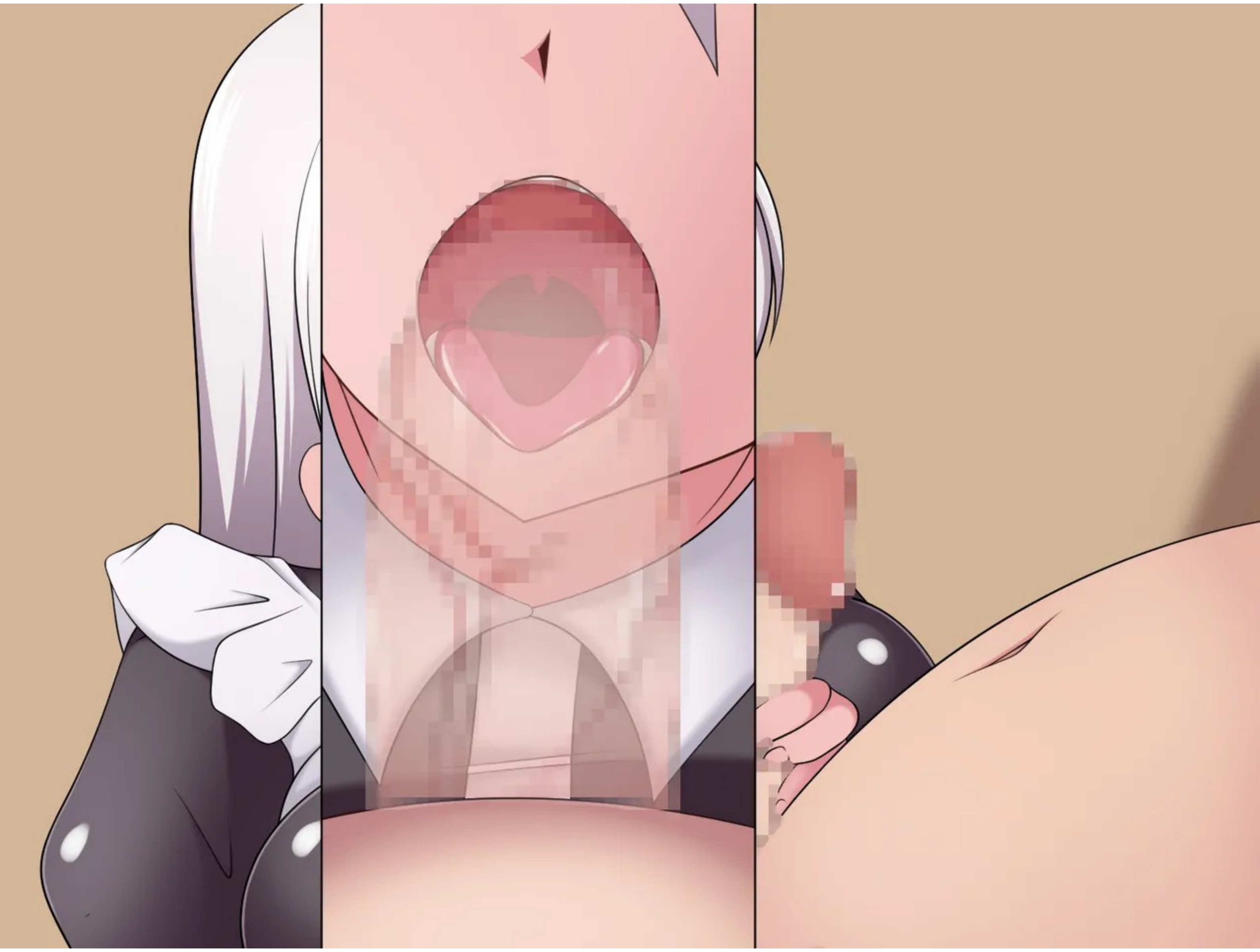
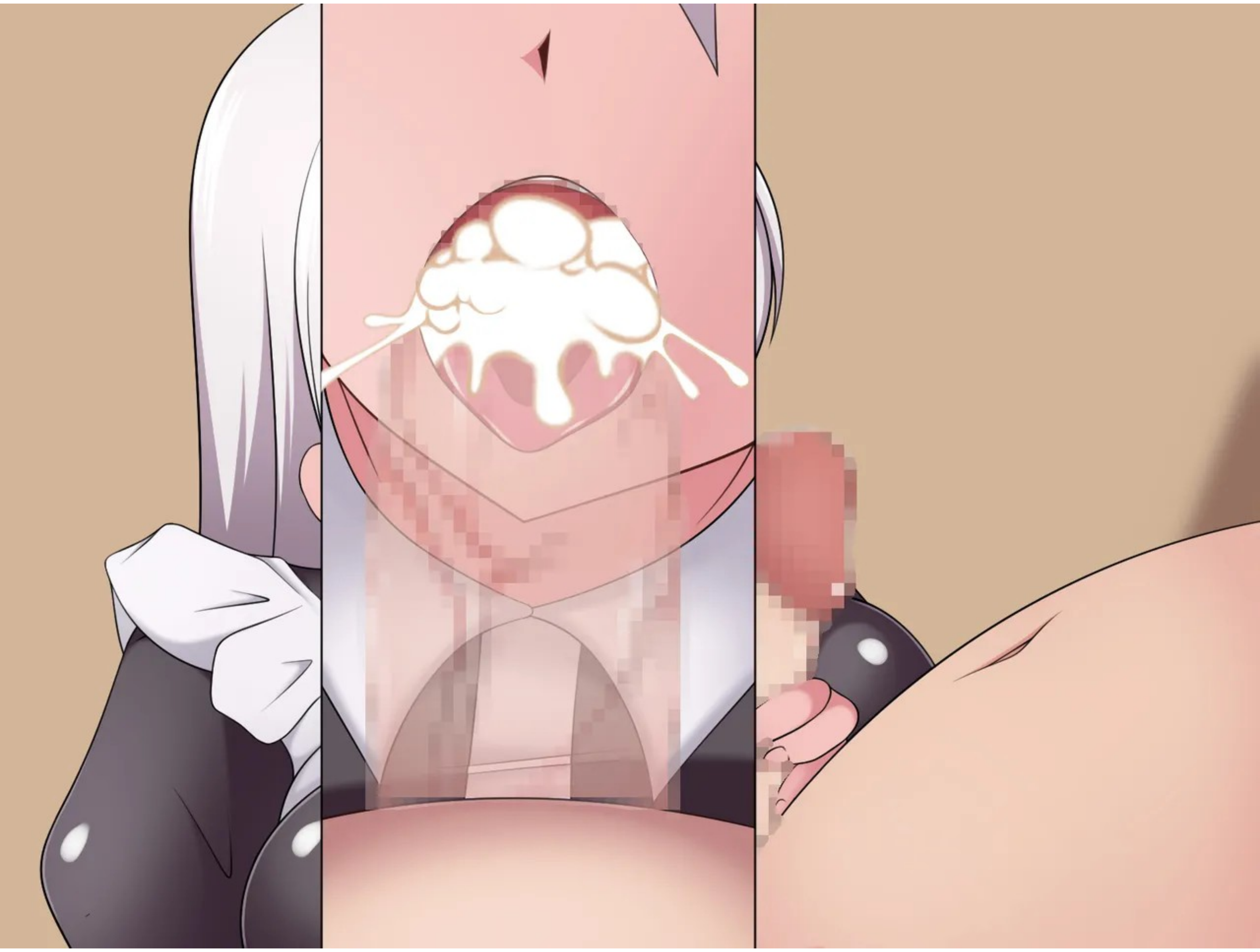
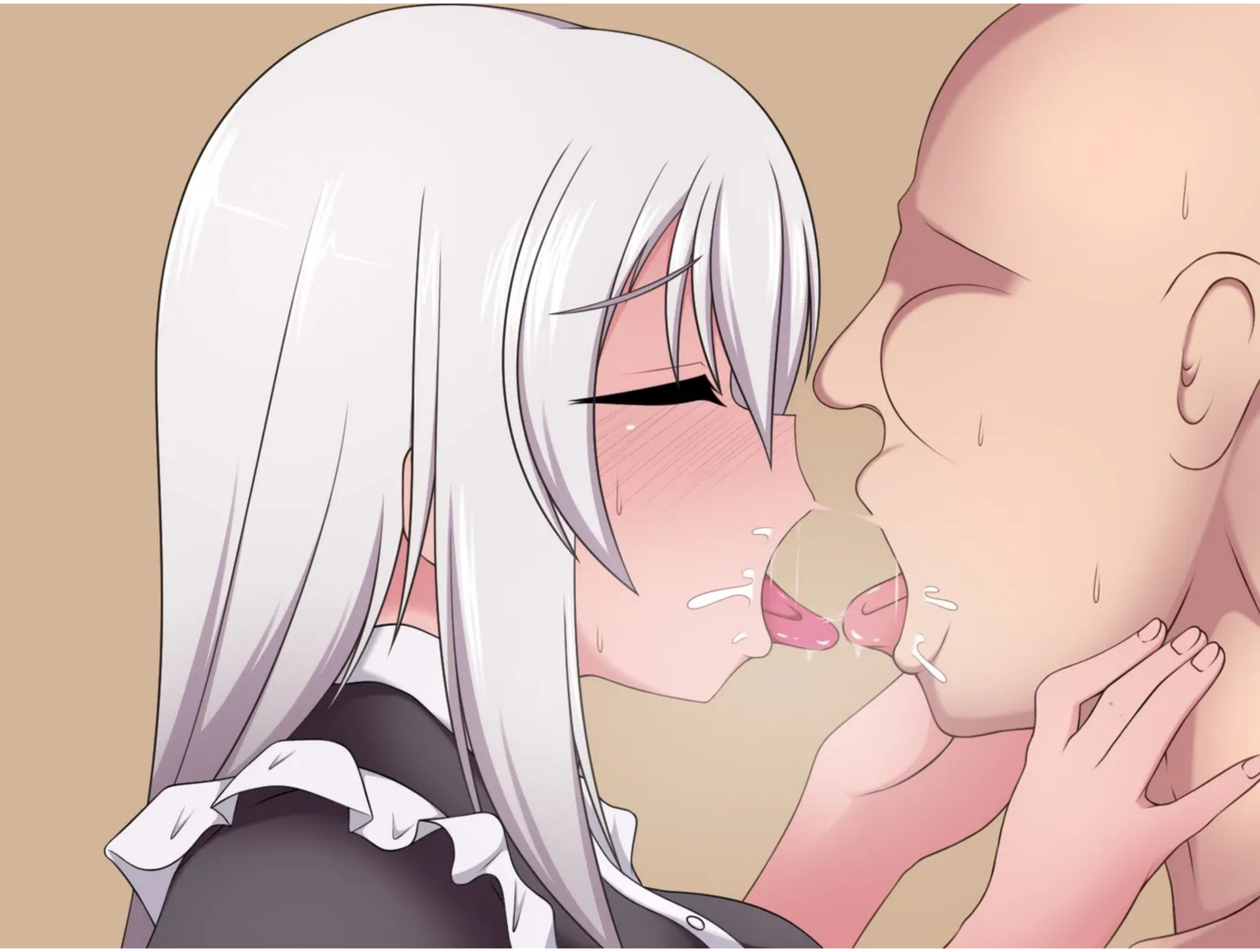
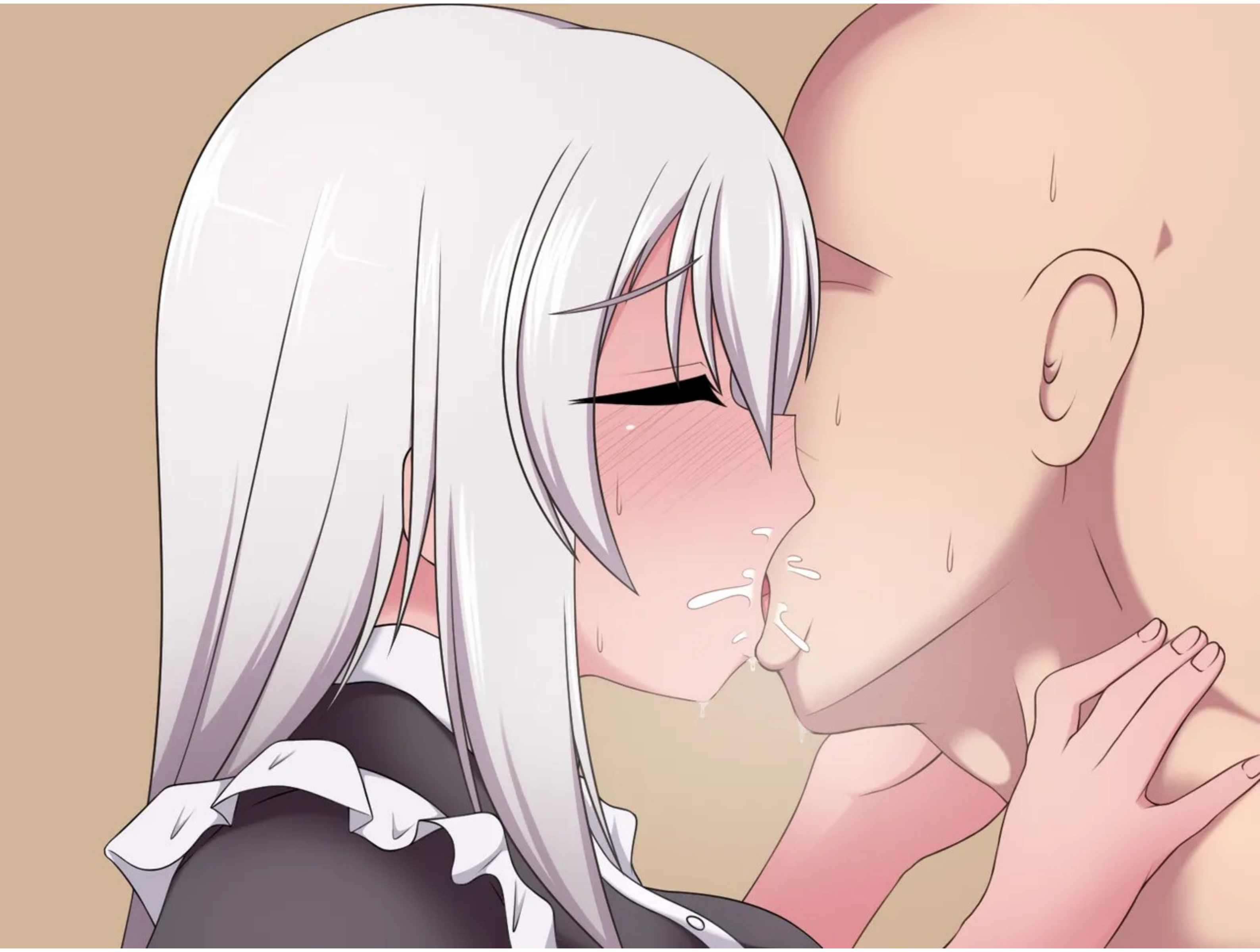
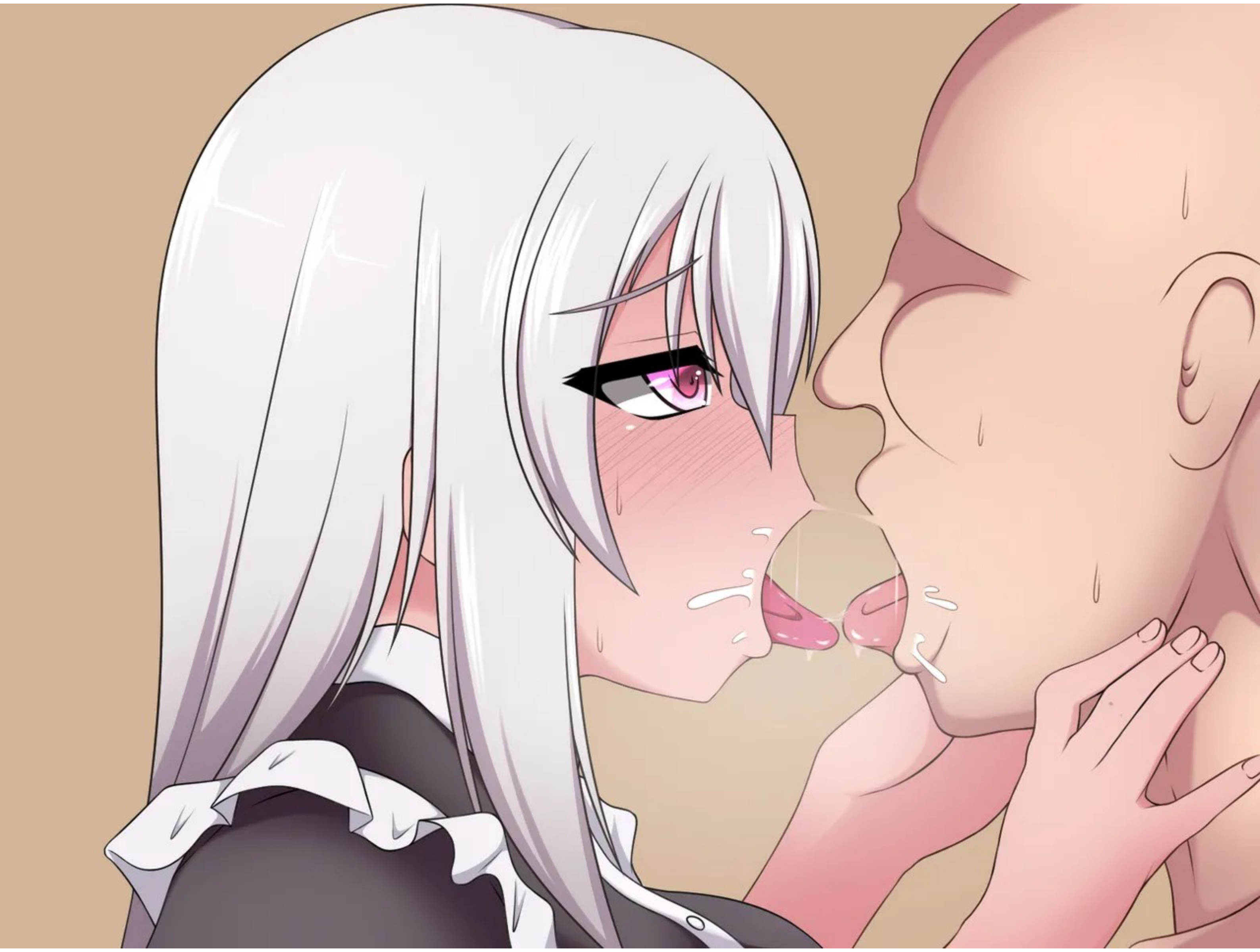
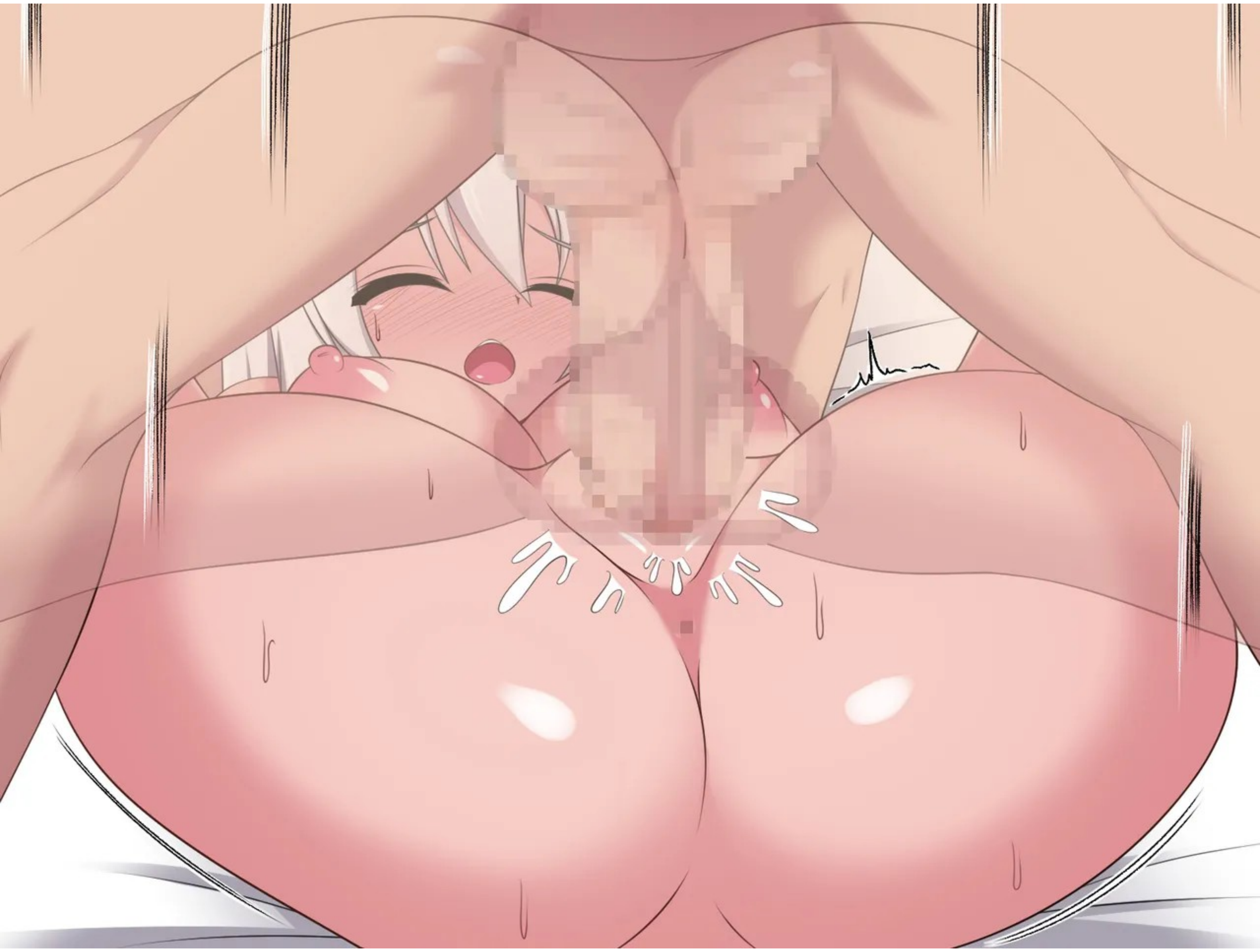
「はは♪今からアニーとボテ腹セックスが出来るかも知れないと思うと楽しみで仕方ないよ」
「それに一人目が産まれたら直ぐに仕込んであげるから期待していてくれよ」
「…この、変態❤」
どぼっ❤
ハーーッ❤
ハーーッ❤
はあ゛❤

『数か月後』
俺は大きくなったお腹をかかえながら
おっさんとの生だしセックスを楽しん
でいた。

「んっ❤これ、すごっ❤赤ちゃんいるのに
ちんこ膣内抉るたび硬く、太くなって…❤」
「んっ❤は、ぁっ❤妊婦相手に
こんなに興奮しやがって
ホント変態だなおっさんは❤」
「はは♪私はパパとママが仲良し
だって産まれてくる子に教えて
上げたいだけさ」
はぁッ❤

おっさんはそう言いながらガチガチに
勃起したイチモツで激しく膣内を抉る。
正直妊婦相手にするような動きでは
ないが俺の体は喜んでそれを受け止め、
膣内は精液を欲しがりキュウキュウと
締め付けてしまう。
はあッ❤
ズプ
ズプ

「妊婦マンコすごい締め付けてきてっ！
…くぅっ❤出すぞ、アニーっ！このまま
お腹の子供に掛けてやるからな」
「うん❤きて、きてぇ❤お腹の中の
赤ちゃんにおっさんの遺伝子で
マーキングしてあげてぇ❤」
ズプッ
ズプッ

びゅる びゅーー❤
「ふぁっ❤あぁっ❤あはぁ❤
赤ちゃんに精液ビチャビチャ
掛けられてぅっ❤」
「いけない事なのに気持ちいいの
止まらないよぉ❤」
ハーー〜〜ッ❤ ハーー〜〜ッ❤

本来安定期でも中出しはいけない
のだが。そんなのお構いなしに俺は
おっさんを求める続けた。
親としては失格なのだろうがそれでも
構わないと思っている。お腹の子供には
悪いが俺の優先順位の一番はおっさん
だけなのからだ。